

「朝鮮人慰安婦虐殺」映像についての考察(1)

高橋 史朗 (麗澤大学大学院特任教授・
モラロジー研究所教授)

1 韓国紙の報道

韓国紙「中央日報」「ハンギョレ」「ソウル聯合ニュース」は2月28日、「旧日本軍の朝鮮人慰安婦虐殺映像資料を初公開」と大々的に報道し、日本の市民団体「日本『慰安婦』問題解決全国行動」⁽¹⁾も次のように報じた。

「日本軍慰安婦被害者虐殺映像が初めて出てきた／1944年に雲南省で米軍が撮影／裸の死体が大量に積まれ『朝鮮人30人虐殺』記録を後押し／虐殺を否定した日本の主張に正面から反論／19秒の映像に凄惨な現場／米軍文書『日本軍が銃殺』と明示」

聯合ニュースによれば、約19秒のこの記録映像は、1944年9月に中国の雲南省で米中連合軍が撮影したもので、朝鮮人慰安婦が日本軍によって虐殺された後、1か所に捨てられた様子が収められており、遺体を埋めに来たと思われる中国の兵士が遺体の靴下を脱がせる場面も映されている。

これは「1944年9月13日夜に日本軍が朝鮮人女性30人を銃殺した」という米中連合軍の文書を裏付ける記録だという。同映像が公開されたのは、2月27日にソウル市庁で開催された「日中韓日本軍慰安婦国際会議」⁽²⁾である。

ソウル市とソウル大学人権センターのチョン・ジンソン教授の研究チームが、2016～2017年にかけて米国立公文書館(NARA)で資料調査を行い、発見したものだという。ナチス・ドイツのユダヤ人虐殺を見るようなこの映像は、同年9月15日に中国雲南省で、連合軍164通信隊写真中隊のポールドウィン兵士が撮影したものである。

映像を発掘したソウル市とソウル大学人権センターは、同時に公開された連合軍報告文書などを通して、この映像が「当時日本軍によって強制動員された朝鮮人慰安婦被害者が集団銃殺された現場」という結論を下した。

ソウル聯合ニュースによれば、米中連合軍は1944年6月から中国とミャンマーの国境地帯にある雲南省の日本軍占領地に対して攻撃を開始したが、ここには日本軍に連れてこられた朝鮮人慰安婦が70～80人いたという。

研究チームの資料発掘を2年前から支援してきたソウル市は、「戦争中に女性を戦場に動員し、性的慰安の道具に使用し虐殺したようなことを再び繰り返してはならない」とし、「日本はこれを否定するのではなく、認めて謝罪しなければ再発を防ぐことはできない」と強調した。⁽³⁾

さらに、2月28日付けハンギョレ新聞社説は、「このような映像を前にして、日本は慰安婦責任を回避し続けるのかと尋ねざるをえない。／米連合軍の記録文書には『1944年13日夜、日本軍が朝鮮人女性30人を銃殺した』という内容もあり、映像が傍証される。

これが公開された以上、日本政府が答える番だ。／日本政府が率直に法的責任を認めて公式的な謝罪とともに賠償をすることが問題解決の正しい開始となる。そうしない限り、慰安婦問題は加害国日本の足かせになるだけだ。衝撃的な虐殺映像まで見つかったことを契機に、日本政府は今や態度を変えて人類の良心に答えねばならない。」⁽⁴⁾と強調した。

2 「日中韓日本軍慰安婦国際会議」における主張の論点

2月27日の「日中韓日本軍慰安婦国際会議」において、ソウル市とソウル大学人権センターがNARA調査の結果、日本軍の朝鮮人慰安婦虐殺を裏付ける資料として、14点の文書、2点の写真、1点の映像を発見したと公表したが、主な主張の論点は次の通りである。

第一に、1944年9月、中国の雲南省騰衝には、朝鮮人慰安婦が30人いたが、連合軍の捕虜となって生存した13人以外の大多数の朝鮮人慰安婦らは、玉砕（「強制的集団自決」との注釈があるが、映像に虐殺している様子が映っているわけではない）を拒否し、一部民間人らと一緒に殺害された。

第二に、朝鮮人慰安婦虐殺の事実は米中連合軍も把握していた。NARAに保管されていた米中連合軍の作成文書には、日本軍の慰安婦虐殺を裏付けるものがあり、騰衝陥落直前の1944年9月13日夜に「ジャップが朝鮮人女性30名を撃った」と記録されている。

第三に、映像は、朝鮮人慰安婦らが虐殺された後、捨てられた姿について、1944年9月15日（騰衝陥落翌日）に撮影されたものであり、写真の遺体と中国人兵士の身なりが映像と同一である。

第四に、日本軍による慰安婦虐殺の証言や記事は公開されたことはあるが、慰安婦の虐殺現場を撮影した映像の公開は初めてである。

3 歴史専門家の見解

(1) イ・ウヨン研究委員の指摘

この主張に対して、国内外の歴史専門家が次々と疑問を表明した。最初に口火を切ったのは、落星岱経済研究所のイ・ウヨン研究委員である。2月28日にフェイスブック上で、次のように疑問を呈した。まず、関連報道から分かった事実を以下の3点にまとめている。

- (1) 6人の死体を映した19秒の動画がNARAに所蔵されている。
- (2) 米中連合軍は1944年9月14日にトンチュンを占領して、米軍が15日に作成した報告書には陥落の一日前の「13日夜、その都市で日本は韓国女性30人を銃殺した」という記録がある。
- (3) トンチュンの占領とともに捕虜になった人の中には朝鮮人慰安婦23人がいた。

この3種類の事実を一括りにして「当時、トンチュンには日本軍によって連れられてきた朝鮮人慰安婦が7～80人余りいたが、日本軍は玉砕を命令した。これに応じない30人余りは虐殺されて、23人が生き残って捕虜になった」と言っているようだが、次の三つの

疑問点を解決できないならば、「想像力を過度に発揮、構成して作ったストーリー」に過ぎないと警告した。

第一の疑問点は、米軍報告書に出てきた「13日夜、その都市で日本軍は韓国女性30人を銃殺した」という記録が、朝鮮人慰安婦捕虜の尋問結果なのか、目撃者の証言なのか噂なのかかわからないということである。占領の翌日に作成された文書であるから、体系的な捕虜尋問の結果ではないはずで、「虐殺」が事実ならば、米軍が日本軍の戦争犯罪問題について全面的調査をしなかった理由も疑わしい。言ってみれば、「朝鮮人女性30人銃殺」は一応の説に過ぎないということである。

第二の疑問点は、問題の19秒の映像資料に出てくる6人の犠牲者が、米軍報告書で言及される銃殺されたという朝鮮人女性30人の一部なのか、その関連が確認されないということである。例えば、19秒の映像資料に出てくる犠牲者は、戦闘中に発生した罪のない民間人犠牲者である場合もあり、軍規が確立していなかった中国人による犠牲者であるかもしれないということである。

第三の疑問点は、捕虜になった「朝鮮人慰安婦23人」が、米軍報告書が取り上げ論じたその「銃殺」(虐殺)を逃れて生き残った者たちだという根拠が分からないということである。「朝鮮人女性30人銃殺」説と「23人の朝鮮人慰安婦捕虜」という事実は、それ自体で互いに関係がなく、前者は真偽を明らかにしなければならないことであり、後者は特別新しいこともない歴史的事実というものである。

つまりイ・ウヨン研究委員の批判の要点は、19秒の映像資料と「朝鮮人慰安婦23人捕虜」は米軍報告書で言及された「朝鮮人女性30人銃殺」を立証できない根拠であるにもかかわらず、ソウル市とソウル大学人権センター研究チームは、「朝鮮人慰安婦虐殺」を語って論理的飛躍をして、マスコミも問題意識なしに報道したという訳である。⁽⁵⁾

(2) 浅野豊美教授の指摘

この映像資料の内容に関して、早稲田大学の浅野豊美教授は3月1日にアップしたフェイスブックで次のように指摘している。

この写真は、山の斜面で、しかも埋葬されていないことから、虐殺ではなく砲撃の犠牲になったことを20年前のアジア女性基金の報告書で紹介した。・・・この報告書はだいぶ改良されて、岩波の『世界』1999(平成11)年11月号の論文、および『軍事史学』2008(平成20)年の日中戦争再論に掲載された論文となった。

ビルマ人の証言で30人を日本軍が殺したという資料がある事は無視できない反面で、玉砕が北東の城壁の隅で行われていること、外に城壁を守るための陣地はあったものの30人を連れ出して外で虐殺できるような余裕は守備隊になかったと考えられること、死体が城壁の外にあるということを写真が示していること、城壁内に追いつめられる前の段階で城壁の外で虐殺されていたとすれば、ご遺体の腐乱は相当進んでいたはずであること、台湾人朝鮮人日本人の慰安婦が生き残って中国軍の捕虜となり写真までとられていること。

以上を考えると、朝鮮人慰安婦のご遺体の写真は、城壁の穴から最後の夜に集団で台湾人朝鮮人日本人の慰安婦が脱出した時に迫撃砲弾を浴びて散会した際に犠牲になっ

た女性である可能性が高いとおもう。もしかしたら脱出の混乱の中で射殺された慰安婦がいたかもしれないけれど、それは日本の守備隊自体が玉砕する過程で道ずれにされたのではなかろうか。脱出と玉砕がせめぎあう混乱の中で一緒に死を選ぶべく射殺された慰安婦がいて、その現場から飛び出したのが日韓台の慰安婦達であったのかもしれない。・・・⁽⁶⁾

ちなみに、女性のためのアジア平和国民基金「慰安婦」関係資料委員会編『『慰安婦』問題調査報告・1999』に掲載された浅野豊美教授の論文「雲南・ビルマ最前線における慰安婦達一死者は語る」には次のように書かれている。

「(NARAに所蔵されている)米軍の写真部隊が撮影した写真の中には『日本人の死体』『朝鮮人の死体』という分類に付された一群の夥しい死体の写真が存在している。・・・米軍の写真部隊が付けたキャプションには、撮影の日付は1944年9月15日で、『埋葬を行おうとする中国兵が騰越で殺された女性を前に不審に思ってたずんでいるところ』(原文の注を参照、英文スペル判読の難しい所あり)と、『大部分の女性は日本軍基地にいた朝鮮の女性たちである』という説明が付けられている。…恐らく写真の遺体は、来鳳山陣地脱出の際に遺棄され、1ヶ月半あまり放置された後、騰越城が最終的に陥落してから撮影されたものと考えられる。」⁽⁷⁾

同論文によれば、騰越⁽⁸⁾の守備兵の玉砕後、中国軍の捕虜となった慰安婦は18名で、日本人13名、台湾人3名、朝鮮人2名であった。また、米軍の写真部隊が撮影した写真の中には、「日本人の死体」「朝鮮人の死体」という分類に付された一群の夥しい死体の写

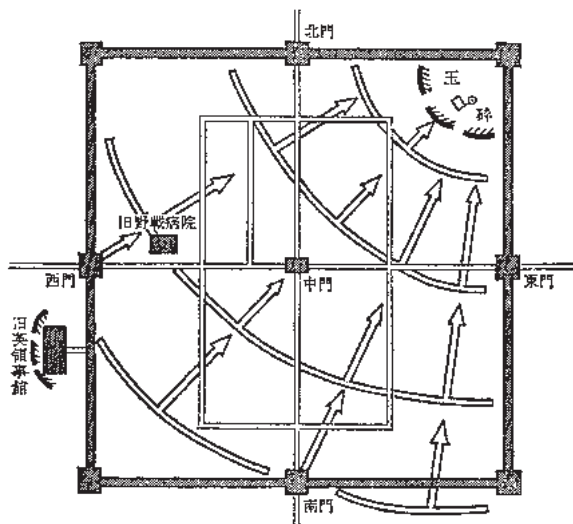


図1 騰越城内市街戦展開図。『イラワジ会戦』302頁より引用。

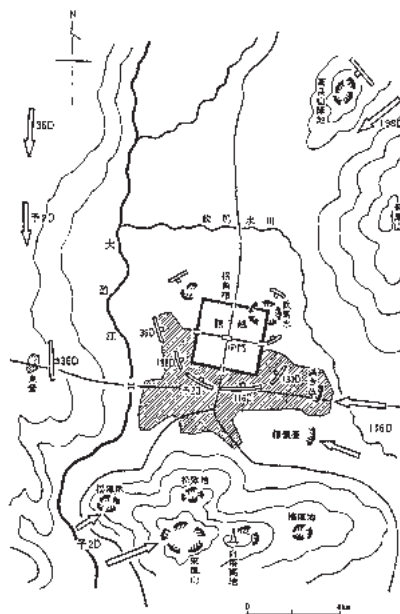


図2 騰越城付近戦闘経過概見図。『イラワジ会戦』294頁より引用。

真が存在しており、1944年9月15日に撮影された死体の写真のキャプションには、「日本軍兵士及び、女性の死体」との説明が付けられているが、「女性」という部分は、タイプではなく、ペンで書き加えられたものであった。⁽⁹⁾

イ・ウヨン研究委員は「ソウル市とソウル大研究チームは20年前に浅野という日本のある研究者が発見した事実と実質的に同じ資料を前に出した」としながら、「それから半歩の歩みも出ないままに、無謀に『日本軍が30人の韓国人慰安婦を虐殺した』という途方もない主張を出した」と批判し、彼らが提示した史料の信憑性に疑問を呈し、繰り返し説明を要請した。

彼らは2016年に収集した写真と今回NARAで発掘した19秒の映像資料の対象は同一だと主張した。前述したように、この写真は浅野教授の二つの論文に掲載されたものと同一のものであるにもかかわらず、彼らは2016年に収集した写真があたかも自分たちが今回新しく「発掘」したというように話したことに、イ・ウヨン研究委員は疑問を投げかけている。「彼らが新しく捜し出したのではない2016年の写真と同一の映像資料に「格別の価値」はない、というわけである。⁽¹⁰⁾

さらに、浅野教授によれば、「30人射殺」はビルマ人の証言であり、米軍の体系的調査の結果ではない。また、浅野教授は玉砕が城壁内の北東の角が最終陣地となつて行われたこと（図1参照）、陥落の前日の夜に日本軍が慰安婦（浅野教授によれば、写真と映像資料に出てくる6人の全てが韓国女性とは言えない）を、死体が発見された騰越城（図2参照）の外の山の斜面に連れて行って虐殺する余裕はなかったこと、城壁内に集まる前の段階で城壁の外側で虐殺されたとすれば、遺体は非常に腐乱していたはずであること、日韓台の慰安婦が生存して中国軍の捕虜になって写真まであること等を考慮すれば、「虐殺」とは言えない。

ちなみに、浅野教授と一緒にNARAに所蔵されている文書を調査(女性のためのアジア平和国民基金の調査)した秦郁彦氏は、『慰安婦と戦場の性』（新潮選書）において次のように述べている。「騰越には朝鮮人を主体とする20数人の慰安婦がいたらしい。…朝鮮人慰安婦たちに面接したUPのランドル記者による報道記事によれば、『仲間は24人いたが、14人は砲火で殺された』などと語った。おそらく、騰越からの脱出組かと思われる」⁽¹¹⁾

(3) 朴裕河教授の指摘

朴裕河世宗大学教授も、3月1日のフェイスブックで、彼らが提示した資料は「慰安婦虐殺」の資料と断定するのは難しい資料だ、と指摘した。そして同教授は、研究の出処と系譜を重視する研究倫理の視点から、同じ素材を扱った浅野教授の先行研究に言及しないことに対して、遺憾の意を表明した。

さらに同教授は、次のように指摘した。今回の発表における犠牲者女性たちの全てが朝鮮人とは断定できない。同じ地域に日本人も台湾人もいたからである。映像の中の慰安婦は、爆撃による死亡である可能性が高い。⁽¹²⁾

朴教授は、「特に悲しいことは、そういう全ての考え（『朴裕河教授が慰安婦問題で間違った主張をしていて生存慰安婦に傷を与えている』）をほとんどの学者が進んで作ったり支持しているという点」としながら、「私はこの事態が21世紀初期の韓国アカデミズム

の汚点として残ることだと確信する」と断言した。

朴教授は、彼らが発表した資料に対して、「ビルマでの慰安婦の死が明らかになったのは既に20年前という点」、「死亡者が朝鮮人だという断定可能な根拠がないという点」、「爆撃でなく銃殺だという断定可能な根拠が無いという点」を提示したが、明確な根拠は未だに提示されていない。⁽¹³⁾

3 日本側史料によって明らかになったこと

(1) 『イラワジ会戦ービルマ防衛の破綻』

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 イラワジ会戦ービルマ防衛の破綻』(朝雲新聞社)には、次のように明記されている。

9月11日頃には、太田大尉以下約70名になり、守備隊の運命も尽きた。

9月12日午前6時、太田大尉は師団長に打電し、これを最後に暗号電を焼き、無線機を破壊した。「現状ヨリスルニ 1週間以内ノ持久ハ困難ナルヲ以テ…13日聯隊長ノ命日ヲ期シ最後ノ突撃ヲ敢行シ…武人ノ最期ヲ飾ラントス」

注 師団司令部通信隊は終日受信態勢にあって最後の一語も聞き漏らさじと確実に受信した。送信も正確でいささかの乱れもなく、玉砕直前の通信とは思われぬ見事さであった。

9月13日 太田正人大尉は故蔵重大佐の命日を期し、残存兵力を率いて敵中に突入し、全員玉砕した。

9月14日 「騰越における日本軍の抵抗⁽¹⁴⁾はすべて終了せり」と報告した。⁽¹⁵⁾

(2) 『拉孟騰越一玉砕の実相』

また、石井皎編『拉孟騰越一玉砕の真相』(雲竜会)にも、当時の様子が次のように記されている。

第3章 騰越守備隊の電文集

9月12日午前6時「現状ヨリスルニ 1週間以内ノ持久ハ困難ナルヲ以テ…13日聯隊長ノ命日ヲ期シ最後ノ突撃ヲ敢行シ…武人ノ最期ヲ飾ラントス」

注 本電報は、交戦中敵の猛砲火に遭い、更にその間隙を縫って打電されたもので、兵团司令部通信隊は、終日終夜受信態勢を持続したまま最後の一語まで漏らすまいとして受信敢行をしたのである。その砲火がどれ程熾烈であつたかは想像に難くなく、この中であつて信務兵の誤信とてなく、且つ最後の一字迄任務の完遂をなし得たことについては、ただただ感激の外はない。思へばこの電文が最後となつたのであるが偶然というには余りにも偶然すぎるその発電番号が『392号』=『ミクニ』と読めることについては、部隊全員の心情天に通じておのずからこの番号に託されたというは愚かなことであろうか。⁽¹⁶⁾

ちなみに、庄司潤一郎・防衛研究所戦史研究センター長は、「日本側の生き残った兵士などの文献からは、そのような(玉砕を拒否したため日本軍により殺害(銃殺)された)

事実は確認できない」「慰安婦にも犠牲が生じていったが、死に至った要因として、大きく二点を指摘できる。第一に、砲爆撃など戦闘の犠牲である。」「第二に、自決である。」「一方、慰安婦の自発的な自決を否定する見解もある。」「たとえ手榴弾を投げ込んだとしても、日本軍が意味もなく慰安婦を殺害したのではなく、葛藤、悩んだ末の行為、換言すれば、最後の手段としての自決の『ほう助』であったようである」と解説している。

(3) 『騰越玉砕記』

さらに、吉野孝公『騰越玉砕記』には、次のように書かれている。

「間もなく、また一群の人影が現れた。彼等は、前者と同じ行動で素早く降りると、私達の林の中になだれ込んできた。よく見ると、彼等はみんな女性である。否、正直言って彼女らは城内の慰安婦達である。その時、私は『ハッ』と思い浮かべた。この女達こそ、あの時、握り飯を届けてくれた人達である。他の戦友たちもそう思ったに違いない。彼女等は鉄帽に軍服姿の雄々しさであった。しかし、その顔は皆恐怖に怯えている。暗い林の中のこと、人数はよくわからぬが、2、30名はいるようである。」

「私達は輸送車を降りて、街外れの大きな民家に入った。ところが、ここで、凶らずも意外な人達に巡りあった。それは脱出の折、闇の中で別れた朝鮮慰安婦の人達であった。24,5名はいたようであった。その中には日本人慰安婦も4,5名いた。彼女達は、私たちの姿を見ると駆け寄ってきて、茶やたばこを接待してくれた。…たとえ男女の相違こそあれ、かつては弾雨の中で死線を越えてきた同志の再会である。

ともに懐かしく。ともに無事を喜び合った」⁽¹⁷⁾（下線は引用者）

ちなみに、千田夏光氏が吉野孝公氏に聞き書きして著した『従軍慰安婦〈続編〉』（三一書房）には、朝鮮人慰安婦たちは脱出する前日、日本人慰安婦に「あなたたちは何も日本に義理立てすることないのよ」と諭され、投降を進められたと書いてある。その数も約30名である。それでは、諭した日本人慰安婦はどうなったか。

「彼女らが手榴弾による自決を遂げたのはこの9月13日夜であった。城の東北に追いつめられた百余名の兵隊の片隅で、迫撃砲弾の炸裂音にまじって、彼女らの体を四散させ、五体をばらばらの単なる肉片にしていく爆発音が聞こえて来たという」

日中韓日本軍慰安婦国際会議に参加した元自衛官の奥茂治氏に同行して、雲南省の省立図書館で膨大なマイクロフィルムから韓国紙の報道を検証する調査を行った友寄貞丸氏は、「韓国がでっちあげ 朝鮮人慰安婦『30人虐殺』事件」（『新潮45』2018年6月号）において、このように紹介した上で、「騰越城内の映像には確かに女性と思わしき遺体が横たわっているが、手榴弾によるものではないだろう。また慰安婦とも決めつけられない。仮に慰安婦のものとしても、銃殺ではなく自決を選んだか、敵の砲撃を受けた可能性が高いのではないか」とコメントしている。⁽¹⁸⁾

4 中国側史料によって明らかになったこと

北海道大学の岩谷将教授が中国側史料を調査した中間報告によれば、遠征軍司令部は

9月14日までに、慰安婦13名を殺害または捕捉、第20集団軍は9月14日に城内3000人を掃滅し、18名の慰安婦を捕捉、陸軍第53軍は9月13日に慰安婦1名を捕捉（116師）、9月14日に慰安婦1名と11名を捕捉、同14日早朝、慰安婦が場外に逃避、陸軍第54軍は14日早朝、数十人が白馬廟から南に逃亡、同日、傷病兵・慰安婦はそれぞれピストル・軍刀により全員自害（発見）、9月12日夜、54軍（予備第2師）（城内）傷病兵・慰安婦は全て自害・銃殺、9月14日朝、54軍 城内は完全に殲滅 白馬廟の残り20-30人が逃亡した。

また、9月18日付『掃湯報』によれば、9月12・13日の明け方、13人の慰安婦が射殺される（逃げた水くみ係によって判明）、9月14日午前、城内日本軍陣地の壁の隙間から慰安婦と思われる十数体の遺体を発見、9月14日早朝、2人の管理者が12人の慰安婦を連れて東門の隙間から水田に向かって逃げてきた。多くの者が軍服を着ていたことから1人が射殺され、1人が傷を負い、13人が捕虜となった。

ちなみに、この9月18日付『掃湯報』の裏付けをハンギョレ新聞に奥茂治氏が問い合わせるメールを送ったが、回答はないという。3月11日のフェイスブックで奥茂治氏は、「私は友寄君に仕事を休んでもらって雲南省の首都・昆明に進出して、韓国が理由にしている国民党の機関紙の記述や松山の現場を確認するために雲南に行ってきました。雲南省の省立図書館で膨大なマイクロフィルムから韓国の新聞報道が問題にした記述を見つけました。中国の図書館では複写は禁止だと言う事でしたが、交渉の末写真に撮ることを許可してもらい入手できました。遺体が発見されたという現場も確認して来ました。韓国の言う日本軍が慰安婦を虐殺したとの記述は全く書かれていませんでした」⁽¹⁹⁾と述べている

3月14日付八重山日報も「“慰安婦虐殺”根拠なし 奥氏、中国で資料確認」と題して次のように報じている。「元自衛官で慰安婦問題を追究する奥茂治氏は13日までに、那覇市内で八重山日報の取材に応じ、2月27日に韓国で開かれた国際会議で、ソウル市とソウル大学の研究チームが発表した日本軍による慰安婦虐殺を否定する証拠を発見したことを明らかにした。現場とされた中国雲南省を訪れ、博物館や図書館を回り、関連書籍の入手やマイクロフィルムを確認、日本軍に虐殺されたとする朝鮮人慰安婦30人が生存し、国民党軍の捕虜になったとする当時の新聞を発見したという。」⁽²⁰⁾

さらに回想録によれば、53軍（116師）は9月13日早朝、十数名の慰安婦を捕捉、慰安婦の管理者によると仲間割れのため、傷病兵・慰安婦（100名）を銃殺することとした。戦闘終了後、城内において600近い日本兵の死体が発見される。その内、100近い慰安婦の死体もあった。捕虜の話によると、これらの死体は全て突撃前夜に殺されたか、自殺したものである。

岩谷教授はこれを次のように時系列で整理している。

9月12日夜 城内の傷病者並びに慰安婦を自害・殺害（54軍）。

（13日を期し最終攻撃（太田大尉）事前に傷病者・慰安婦の処置）⁽²¹⁾

9月13日 慰安婦1名を捕捉（53軍）。

9月14日 早朝に慰安婦を含む数十人～百人が逃亡（53・54軍）、（13日夜から逃亡開始）⁽²²⁾

城内掃湯時に自害した傷病者、殺害された慰安婦発見、慰安婦合計12名捕捉、最終的に18名の慰安婦を捕捉（20集団軍）。

以上を踏まえた岩谷教授のまとめ（史料から判断される最も蓋然性の高い状況）は、

- (1) 9月12日夜半（あるいは13日明け方）城内本部に所在する傷病兵全員と慰安婦の一部が自害あるいは殺害される（強制などは不明）。
- (2) 9月13日の最終攻撃以降一部の兵と慰安婦が場外脱出を開始する（一部捕虜となる）。
- (3) 9月14日、東南角の陣地から慰安婦、残兵が脱出を開始し、城内で殺害された傷病兵・慰安婦が発見される。
- (4) その後、13-14日に脱出した慰安婦らが捕虜となる。

そして、米側報告の30人は13人の可能性があり、写真と30人殺害は無関係と結論づけている。

5 米国立公文書館所蔵文書によって明らかになったこと

日中韓日本軍慰安婦国際会議で公開された「文書」は14点ある。まず「1944年9月15日付作戦日誌」は、「13日夜に市内でジャップが朝鮮人女性30人を撃った」（G-3 DAILY DIARY SEPT 15,1944）、前日の「9月14日付作戦日誌」は、「昨晚、ジャップが軍旗を燃やし、指揮官が切腹した。すべての負傷者及び民間人は殺害された」と明記している。

また、複数の文書が騰衝に朝鮮人慰安婦がいたことを記述しており、「1944年9月9日付作戦日誌」は、騰衝に30人の「朝鮮人娼婦」がいた旨記述していることが判明しているが、これらを含むNARAに所蔵されている文書、映像、写真については、現在調査中のため、『歴史認識問題研究』第4号において本稿の続編を書き、全体的な考察と結論をまとめたい。

なお、トニー・マラノ氏（テキサス親父）が、NARA所蔵の虐殺映像の説明文には、「中国兵が死んだ日本兵から靴下を剥いている」と記述されており、「慰安婦虐殺」を示すものではない」と指摘していることを付記しておきたい。この点も含めて次号で明らかにしたい。

注

- (1) アムネスティ日本・ピースボートなど日本の約50の市民団体や個人が結成した団体。
- (2) 同会議に出席した日本人は、2000年の「女性国際戦犯法廷」を主導した「女たちの戦争と平和資料館」(wam)の渡辺美奈事務局長と「日本軍『慰安婦』問題解決全国行動」の小林公氏で、小林氏は日本政府が認めた慰安婦の強制動員に関する文書を同会議で紹介した。
- (3) 2018年2月27日付聯合ニュース
- (4) 2018年2月28日付ハンギョレ新聞社説
- (5) イ・ウヨン研究委員の2018年2月28日のフェイスブック参照
- (6) 浅野豊美教授の2018年3月1日のフェイスブック参照

- (7) 浅野豊美「雲南・ビルマ最前線における慰安婦達—死者は語る」(女性のためのアジア平和国民基金「慰安婦」関係資料委員会編『『慰安婦』問題調査報告・1999』所収) 69頁。
- (8) 騰越(中国名「騰衝」)は、明代に築かれた中国の城壁都市で、城壁はほぼ正方形で、1辺が約1キロで、城壁の高さは約5メートル、外側は石、内側は積土によって構築されていた。
- (9) 同68頁
- (10) 2018年3月30日、メディアウォッチ「日本軍が慰安婦を虐殺」と報じたメディア22(上)
- (11) 秦郁彦『慰安婦と戦場の性』新潮選書、1999年
- (12) 2018年3月30日、メディアウォッチ「日本軍が慰安婦を虐殺」と報じたメディア22(中)
- (13) 同(下)
- (14) 騰越城の周囲の山々に築かれた砲台陣地が6月下旬から攻撃され、7月4日からは騰越城の中央門に対する砲撃と航空機による爆撃が開始された。
- (15) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 イラワジ会戦—ビルマ防衛の破綻』朝雲新聞社、1969年、301-302頁。
- (16) 石井皎編『拉孟騰越—玉砕の真相』雲竜会、1954年、153-154頁
- (17) 吉野孝公『騰越玉砕記』私家版、1979年
- (18) 友寄貞丸「韓国がでっちあげ 朝鮮人慰安婦『30人虐』事件」、『新潮45』2018年6月号、109-110頁
- (19) 奥茂治氏の3月11日のフェイスブック参照
- (20) 2018年3月14日付八重山日報
- (21) 品野実『異城の鬼—拉孟全滅への道』谷沢書房、1981年、長尾唯一『玉砕—全将兵肉弾と化す』日本文芸社、1965年、西野留美子『日本軍「慰安婦」を追って』梨の木舎、1995年
- (22) 吉野孝公『騰越玉砕記』私家版、1979年